20230716　朝礼拝　コヘレトの言葉 5 章 12～19 節

「経験のススメ」

今日の説教を考えるにあたり、これもある意味、聖霊の助けなのかも知れませんが、今から 10 年前に書いた修士論文を見てみよう、という気付きを与えられました。修士論文と言えば、立派に聞こえますが、その実、10 歳も若い、10 年も未熟な自分が書いた文章を読み返すというのは、これはかなり恥ずかしい行為であると言えます。実は、敦賀教会に着任してすぐの福井地区婦人会で修士論文に基づく発表をしたことはあるのですが、それとて、もう 6 年近く前の話で、今更自信満々に語れるほどの勢いは失ってしまっています。今日の御言葉に関係のある、確か面白そうなことが書いてあったなぁ、と思いつつ、でも、今さら自分の論文を読み返すのは、めちゃくちゃ恥ずかしいとも思われて・・・。恐る恐るパソコンに保存されている古いデータの中を探してみました。

私の修士論文のテーマは「幸福論」でした。パウロさんが、イエス様の御言葉を紹介する形で語った「受けるよりは与える方が幸いである」という使徒言行録 20 章 35 節の聖句を根拠として、現代社会の色々な研究結果を基に、いっぱしに論じてみたわけです。本当に「受けるよりは与える方が幸いなのか、どうか」と。個人的な経験として、「与える」ことを続け過ぎると、自分の気力がすっからかんになって、とてもじゃないけれど、幸せとは思えませんでした。「与える」ばかりだと、経済的には「貧乏」になり、精神的にはいわゆる「燃え尽き症候群」という状態になってしまいます。でも、聖書には「与える方が幸いである」という。そこには、私にとって無視できない矛盾があったわけです。結論から言いますと、「あまり結果を焦ると幸せにならない」「“果報は寝て待て”のような待つ姿勢が欠かせない」ということになりました。で、結果を焦らず気長に待つためには、その待つ間にも適度に充実感を憶えて、恵まれていないといけないわけです。じゃないと、

待っている間にすべてを諦めてしまいたくなりますから。つまり、「与える方が幸いである」という教えが、ちゃんと実現するためには、与えるという行為を開始して、幸いを頂くまでの期間を、心地良く待つことができるか、どうか、ということが大事になってきます。そして、「心地良く待つ」ためには、やっぱり、そのための覚悟や準備や、あるいは、信仰が欠かせません。「大丈夫、神様がちゃんと報いてくださる」という信仰がないと人は迷いますし、「まぁ、別にあと 10 年や 20 年は報われなくても平気」くらいの経済的・精神的な覚悟や準備がないと息切れを起こします。そうした信仰や覚悟や準備が無い状態で、「与える方が幸いである」という教えを実践してしまうと、多分、幸せにはなりません。私たちは、無限の愛と力をもったイエス様ではないのだから、いつか必ず破綻します。福祉や医療の現場でも、牧師や教会の現場でも、そうした実情があることが、実証的研究から明らかにされていました。実証的研究というのは、実地調査や統計調査を通して、現実社会の様子を基に研究をするということです。聖書や宗教書を究める神学研究とは、だいぶと方向性が異なるものですが、今を生きる人間を知るためには、実証的研究の成果が欠かせませんでした。そして、「人は決して“周りの人の満足”だけを求めては幸せにはなれない」という当たり前の結論が、そこにはやっぱり明らかにされているのです。

「神様が必ず報いてくださる」と疑わないことで日々慰められること。自分で自分にご褒美を与えて、自分で自分のご機嫌を取れるくらいに経済的にも精神的にも満たされていること。そうじゃないと、いずれ「もうこんなのやってられない」と思えてくるものです。それが、おそらく人間として「分」なのだと思います。私たちは人間としての分を弁えた上で、「受けるよりは与える方が幸いである」という教えを実践していかないといけないと、個人的には思っています。

そういう風に考える私にとって、今日の聖書箇所は、非常に魅力的に思えるものです。今から 10 年前の私は、そのことに気付きませんでしたが・・・。17 節と 18 節のところ「見よ、わたしの見

たことはこうだ。神に与えられた短い人生の日々に、飲み食いし、太陽の下で苦労した結果のすべてに満足することこそ、幸福で良いことだ。それが人の受けるべき分だ。神から富や財宝をいただいた人は皆、それを享受し、自らの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。これは神の賜物なのだ」と。カルト宗教の類は、富や財産を教会や神様のために捧げるように勧めているようですが、どうも、それは間違いのようで、神様から与えられた富や財産は、労苦の結果として楽しむようにと定められているのだと言います。そして、それは神の賜物だと。無理をして「与えること」に苦心した末に、ようやく天にある幸福を得ることができるのだ、とは少なくともコヘレトの言葉は言いません。実は、ここにコヘレトの言葉の最も重要な考え方があります。コヘレトの言葉における幸福というのは、何らかの労苦や努力の結果ではなく、その労苦や努力の中に、すでにあるのだ、と言うのです。

「労苦や努力の中に幸福がある」と言いますと、非常に禁欲的と言いますか、スパルタと言いますか、私の苦手な体育会系な感じもしますが、もうちょっと詳しく説明させてください。このコヘレトの言葉を書いた人は、努力を積めば、とか、精進をすれば、その結果として、いつか必ず神様が幸福を与えてくださる、と考えるのは間違いだと言いました。さらに詳しく言いますと、確かに「しっかりと努力を積んで」「ちゃんと精進をすれば」、大きな結果を手にすることができるけれど、「限りある人生において、その大きな結果に、どれほどの価値があるんだ」と言うのです。その辺りの冷めた考え方が 14 節と 15 節に書かれています。「人は、裸で母の胎を出たように、裸で帰る。来た時の姿で行くのだ。労苦の結果を何ひとつ持って行くわけではない。これまた、大いに不幸なことだ。来た時と同じように、行かざるをえない。風を追って労苦して、何になろうか」。生前、どれだけ労苦を重ねて、実績を上げて、財宝を得て、富を蓄えたとしても、それを天の国に持っていけるわけじゃない。裸で生まれて、裸で帰るというのに、その労苦に何か意味があるのだろうか、

と。そんな風にこのコヘレトの言葉を書いた人は考えて、そして、彼の口癖でもある「空しい」という言葉を添えるのです。

では、このコヘレトの言葉を書いた人は、どこに幸福があるのかと考えていたのかと言えば、それこそ 17 節と 18 節のところなのです。「神に与えられた短い人生の日々に、飲み食いし、太陽の下で苦労した結果のすべてに満足することこそ、幸福で良いことだ」と。つまり「幸せなこと、いっぱいあるじゃないですか」と。昼休みに一服するお茶もそうだし、一日働いた後に飲み交わすお酒もそうだし、同じ労苦を担う者同士の励まし合いや、称え合いの中にも幸せがあるでしょう。週毎に集う礼拝で、一緒に過ぎし 1 週間に感謝したり、来る 1 週間に希望を見出しだしたりする日頃の信仰の営みも、味わい深い幸せな出来事です。大切な家族と過ごす何気ない時間も振り返れば、とても尊く掛け替えのないものです。コヘレトの言葉を書いた人の見つけた幸せとは「努力して、精進して、いつか必ず」という遠くて大きなものではなくて、今日明日という身近なところで与えられるものなのです。「神に与えられた短い人生の日々に、飲み食いし、太陽の下で苦労した結果のすべてに満足することこそ、幸福で良いことだ」。確かに、そのような幸福とは、あまりに庶民的に過ぎると思えるかも知れません。しかし、本当は、そんな日々の小さな幸せが、私たちの人生を支えているのです。時には宝くじを買って、大きな夢を思い描くことも良いでしょう。実現の難しい希望を見据えて努力を続けることにも意味はあります。テレビやネットに溢れる絢爛豪華な他人の人生を見て憧れることもあってよいでしょう。私たちは、そういう遠くて大きな幸福に対する願望によって引き上げられ、自分の人生を向上させたり、進歩させたりします。しかし、だとしても、その遠くて大きな幸福を得るまでに、私たちの心と体を養い、支えるのは、日頃の小さな幸せの連続なのです。神様に与えられた日頃の何気ない、当たり前の小さな幸せが、私たちの明日を生きるための原動力になっていきます。そして、その小さな幸いこそ、実は永遠の価値を持つもので

もあります。

そんな小さな幸せを一言で総括するなら、それは多分「経験」なのだと思います。「モノ」や「カネ」ではない、「経験」です。私たちの人生を支えている小さな幸せは、日々の一つ一つの「経験」です。例えば、飲み食いすること、誰かと一緒に過ごすこと、汗をかくこと、運動すること、作ること、植えること、書くこと、読むこと。まぁ、それらの中には「趣味」と言い換えて良いものも含まれてきますが。私たちは、神様に守られて、今日も明日も、良い経験を重ねることができる。祈ること、礼拝に出席すること、讃美歌を歌うことも、良い経験でしょう。そして時々は遠出をしてみることも、頑張って不慣れな経験をしてみることも、良いかも知れません。そして、そのような「経験」こそ、私たちが死んだ後も、魂と共に持ち合わせ、天の国へと携えていけるものです。私が、ご葬儀でよく言うことですが、「先に天へと帰っていった方に、この地上での歩みを胸を張って報告できるように、生きていきましょう」と。「モノ」や「カネ」は、天の国の門を通れませんが、「経験」は私たちの魂に固く結びつき、喜びと希望を与えるものだと言えます。

私たちが快く与えて、主の教えを全うするためにこそ、良い経験を重ね小さな幸せを頂いて参りたいと思います。私たちの日々の労苦を通して得られる神様の賜物が、私たちと、そして私たちの隣人との幸いに繋がってゆきますように。お祈りを致します。

神さま。今日もあなたに導かれて、この礼拝堂に集えたことを、心から感謝致します。あなたは私たちに日々の幸いを備え、その幸いを享受し、楽しむことを見守ってくださいます。今日から始まる１週間も、私たちのことを顧みて、幸いと恵みで満たしてください。そして、あなたから豊かな賜物を頂くことで、私たちも隣人のために、社会のために、教会のために良いものを与えてゆくことができますように。私たちの信仰の歩みを支え導いてください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。